

第7回研究大会課題研究シンポジウム（概要報告）  
「子どもの日常生活から学力問題を考える：生活リズムをつくれないうちこどもは、学ぶことができない」

末崎，雅美

<https://doi.org/10.15017/9080>

---

出版情報：生活体験学習研究. 6, pp.111-114, 2006-03-28. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：

## 第7回研究大会 課題研究シンポジウム（概要報告）

### 「子どもの日常生活から学力問題を考える —生活リズムをつくれなない子どもは、学ぶことができない—」

日 時：2005年11月13日(日) 13：00～15：30

場 所：福岡県立社会教育総合センター

コーディネーター：桑 原 広 治（熊本県球磨村立一勝地第二小学校）

シンポジスト：横 山 正 幸（第一福祉大学・日本生活体験学習学会会長）

正 平 辰 男（東和大学・日本生活体験学習学会副会長）

廣 畑 伸 暁（福岡県宇美町役場生涯学習推進本部事務局長・元中学校校長）

高 橋 幸 子（福岡県鞍手町教育委員会・元小学校校長）

コメンテーター：大 坪 靖 直（福岡教育大学）

## 課題研究シンポジウム

# 「子どもの日常生活から学力問題を考える——生活リズムをつくれな い子どもは学ぶことができない——」

シンポジウムは、2005年11月13日の午後に行われた。この日の午前には、県立社会教育総合センター主催事業「子どもの体験カーニバル」が行われており、親子連れに交じって、学会会員が体験学習を楽しむ姿も見られた。「体験カーニバル」への参加者が、シンポジウムへ参加することも見込んで、公開シンポの日程が組まれていたが、残念ながらそうした参加者は皆無だった。また、シンポジウムへは学会会員の参加も少なく、こぢんまりとした会になってしまった。しかし、登壇者による発表は白熱し、フロアとの質疑応答の時間には有意義な議論が交わされた。本稿は、このシンポジウムの内容についての報告を行う。記録の方法上、十分に内容を網羅できなかったが、大部分の内容については収録している。

シンポジストは横山正幸氏（第一福祉大学、学会会長）、正平辰男氏（東和大学、学会理事）、廣畑伸暁氏（元中学校校長）、高橋幸子氏（元小学校校長）の四名、コメンテーターに大坪靖直氏（福岡教育大学）、コーディネーターに桑原広治氏（球磨村立一勝地第二小学校）のメンバーで行われた。「学力問題」を議論する内容とあって、登壇者は学校教育関係者を中心に構成され、社会教育の分野から正平氏が、子どもの発達と学力との見地から横山氏が発言することとなった。

最初に、桑原氏から学力問題と生活体験学習に関し、「総合的な学習」をめぐる動きの話がなされた。昨今の大学生の学力低下の要因が、「ゆとり教育」や「総合的な学習」にあるとする風潮が、詰め込み教育への回帰になろうとしているが、果たしてそれで良いのだろうか、「学力低下」といわれる要因はどこにあるのか、という問題提起がなされた。

### ◆小学校の立場から～「パワーアップ家庭学習」の効果

以前小規模の小学校の校長を勤めていたという立場で高橋氏からは、「自ら学び自ら考える力として意欲の問題は大きく、目に見えない学力かもしれないが、見える学力として『読み書き算』ができることは重要で

ある。基礎的な学力として読み書き算がしっかりと身に付いた上で意欲的に学ぶことができ、生きる力を育むことができる。」ことを前置きされた上で、子どもの生活リズムを正していくことの重要性が述べられた。以下、発言内容である。

子どもの生活リズムづくりに対して、学校から家庭に一步踏み込むことの必要性を感じ、「パワーアップ家庭学習」の実践を行った。全校児童60名程度の小さな学校だが、学力格差の二極化が起こっており、シビアな現状に対してあきらめ感の強い子どもがなかなか意欲を持たず、人間関係が変わらない少人数学級の難しさから、「学校全体」での取り組みとして始めた。「パワーアップ家庭学習」は、学校から家庭に働きかけ、1年生から6年生まで全ての子ども家庭での学習時間を学年×10分間必ず確保するという試みであった。家庭で毎日10分間、テレビを見ないで机に向かう、そのために親の意識への働きかけも同時に行っていく。その中で、子ども家庭での生活リズムに関心を持ってもらうという取り組みであった。子どもの生活リズムが定着しない阻害要因に大人中心の夜型生活があり、加えて子どもに対するしつけの甘さがある。早寝早起きや朝食の大事さが分かってない親もいる。

小さな学校ゆえ、いろんな事が直ぐに地域に広がってしまうが、それを逆手にとって「パワーアップ家庭学習」の実践を行ってきた。3年経ったが、今でも継続されているとのことである。

学級担任には、努力の結果が子どもたちの目に見えるように工夫をさせたりした。ある4年生の女の子は「先生、私、頭が良くなってるみたい」と言ってきたが、自分で継続できたことが自信となり、その結果、テストや先生の言うことが分かるようになってきたからではないか。こうして学力が子どもの意欲をつくり出すのだ、ということが分かった。

また、このことをPTA新聞に取り上げたりして、地域の親御さんに取材をしてもらったり、それを子どもが読んだりして着実に成果を積み重ねた。その記事の内容から、「私たち親は子どもの学習意識に対してもう少し関心を持つべきだと思います。全て学校任せにしないで…宿題も学習に集中してやれるような環境を」というコメントがあった。中学生をもつ親御さんからは「中学生の我が子も小さい頃から学習する習慣

をつけたかった」とのこと。小学校の3段階評価と違って、中学校では中間・期末考査の点数で学力がはっきりと見えるだけあってショックを受ける家庭もあるのだろう、とのこと。PTA新聞によって、「親が親に働きかける」という構図が生まれ、同じ親の意識を変えるのに有効だった。先生が一生懸命やっていることが、親に伝わり、子どもの意欲に結びついた、ということであった。

#### ◆中学生の「家庭に対する満足度の低さ」と生活意欲との相関

元中学校校長の広畑氏からは、まず中学生も授業以前に学ぶべき問題があり、特にコミュニケーション能力の必要性が指摘された。

中学校も、基本的には小学校が抱えている問題と同じ部分がある。学力の問題と生活リズムの問題である。学力との関連で言えば、コミュニケーションにおける話す力を特に教えていかなければならない。さらに人間関係をきちんと確立する力も必要とされ、役割分担などを通して教えている。中学では、問題解決をしながら育つ学力によって、次の学力につながるエネルギーが出てくるが、その前提条件としては「子ども自ら」という主体性が必要である。

また、中学校は「三つの縛り」（生徒指導、部活動、進路指導）があって、その中で子どもを育てているという実態が子どもの生活にも影響を与えている。夜中に「子どもを捜してくれ」と親から連絡があるが、当の親は捜そうとしないということもあった。また、中学ではやはり部活の存在は大きい。今日の体験学習のイベント（午前中の「体験カーニバル」のこと）も中学生の姿は見えないが、部活に忙しい子どもは多い。「部活熱心な先生は良い先生」ということになる。さらに進路指導では、「進路の神様」とも言うべき教員が、子どもの進学先を「赤青黄」と信号を付け振り分けることで、子どもたちもレッテルとして日常生活に持ち込んでしまっている、というような実情があるとのこと。

また、中学生への調査から、長時間テレビを視聴する子どもの多さや、睡眠不足、無気力感がある子どもの存在が取り上げられ、家庭生活への満足度が低い子どもほど体調不良を訴えており、規範意識が低いとい

う結果も示された。そうした体調不良や不満が「学校に行きたくない」という感情になる。つまり、家庭の満足度を上げることで、学校生活への意欲が増し、学習意欲と学力の向上につながるのでは、ということである。しかし、家庭だけで解決するのは難しく、学校が連携をとることが重要である。

その解決の可能性が大きいのは何と言っても「学級」である。中学校では小学校と違い、一日の中で先生が次々に変わる。教師が意欲を持って授業に望んでも、だらけているクラスもある。しかし「学級」では毎朝毎夕教員と子どもがお互い顔を合わせる。確かに様々な問題も起こるが、子どもたちが自ら考えて継続プランをたてていく。さらに、授業参観の時には、保護者に健康診断のデータにコメントを入れてもらって、そこから「次の参観日まで家庭で何をされますか」と課題を考える。そうして家庭とつながることもあるから、まさに「学級」は保護者と教師をつなぐ場である。

学級の中では1分間スピーチを継続し、子どものコミュニケーション能力を高めた。大人しい子どもも、集団から外れた子どもも誰もがスピーチすることで子どもが確実に変わった。しかし失敗した例がある。それは総合的な学習でのことで、職場体験学習に行った先から苦情があった。挨拶、メモ取りができない、とのこと。総合的な学習ははじめに「体験ありき」になってしまって、何を教えるべきか、役割や人間調整能力がついたかどうか確かめなければいけなかったのではないかと思った。

#### ◆通学合宿での子どもの姿と学校との連携—調査から見えてきたこと

正平氏からは、庄内町の生活体験学校の通学合宿や通学キャンプにおける子どもの生活の場面と学力との関連として、言語能力や根気や先行体験の有無といったことがあげられた。以下、発言内容の要約である。

「通学合宿のメッカ」とも言われる庄内町で通学合宿が始まったのが昭和58年。通学キャンプから始めて、プログラムに手応えを感じ、評判が高まって専用の施設である生活体験学校を作り上げた。現在も視察が絶え間なく訪れているが、同じような施設は他には一つもできていない。しかし通学合宿のプログラムは今後とも広がっていくだろう。

今回のテーマは「学力」であるが、測定できる学力というのは学習指導要領にある内容が子どもに習得されたかどうかしか測れないのではないか。もちろん見えない学力があるということも承知しているが、それに関しては岸本氏の「言語能力、根気、先行体験」という指摘に注目したい。通学合宿の場面でも問題として感じることもある。例えば鍋を探している子どもが、「おじさん、鍋」と話しかけてくる。文章ではなく単語で会話をする、大人に対してきちんと敬語が使えない、という状況。きちんと文章と敬語を使って会話をするよう叱ることが多い。また、説明をしてもたった5分の話が聞けない、洗濯物もキッチンと畳めないためにぐしゃぐしゃにしてしまう、集中力や根気が続かない…など子どもの具体的な姿が色々ある。それは家庭の中で十分に教える体験が省略されており、口先は動いても手先が動かない子どもを育てているのではないか。これでは、学校の学力以前の問題で、学力低下は免れない結果である。

また、学校との連携、と言う点では、以前は生活体験学校という組織としての本格的な連携と協働にはほど遠かったが、ボランティアのコーディネートなど学校の体験学習へのバックアップ、中学校の宿泊合宿など、ようやく先が見えてきた感がある。小学校5年生では、全面的に社会教育と生活体験学校がバックアップし、一泊二日の中でボランティアや材料、手段、場所など生活体験学校が持っている全てを提供した。そこで培った信頼感に基づいて、九大と調査を行い、データを学校に返したことで様々なことが見えてきた。調査の中で、気になる特定の子どもの姿が浮かび上がったが、自己肯定感や自尊感情が低く、テレビやテレビゲームの時間が長く、自宅学習の時間が見られないという状態で、学校でも、指導困難な状況にある子どもがいるとのことであった。

その調査結果での生活体験と学力との相関が高い項目から、学力が高い子どもは、「通学合宿に参加する」「友達が5人以上」「ゲームは1時間以下」「自己肯定感が高い」などの結果がだされた。通学合宿に参加している子どもが成績がいいのは、親の養育態度が反映しているのだろう。今後の調査として、生活実態調査や体力テストとの相関などを考えている、とのことであった。

#### ◆子どもの学力は充分持ちこたえている—まずは意欲をそだてる取り組みを

横山氏からは、日本の子どもの学力は国際的に下がったとはいえそれでも上位にあり、さらに、他の国に比べ教員の力量もトレーニングを受けたしっかりしたものであり、国際的に見たら相対的に日本の学力と学校教育は非常に充実している、と前提においた上で、問題がどこにあるのかと言う点で「主体」にある、という指摘がなされた。

子どもの「学ぶための心」がどうなっているのか。「勉強」とは本来面白くないものに強いて勉めるものであり、今の大人でも、好きだった人は少ないだろう。しかし子どもたちは9割以上が「学校が好き」である。ただ、全体的に子どもたちが持つエネルギーが近年において低下している調査結果もある。したくない事に対する耐性や学習に対する意欲が下がってきているのは深刻な状況だろう。「したくない」「生きたくない」と抑鬱傾向にある子どもも少なくない、ということが、様々なデータを用いて紹介された。どうしてこのような状況にあるのだろうか。

さらに理科や社会の理解の元になる体験としての遊びが少ない調査結果もある。時間を忘れ仲間とたくさん遊ぶことが、子どもにとってのリフレッシュにもなる。戦前の子どもは遊びの種類を4千以上知っていたが、今の子どもは20種類程度しか知らない。遊びが室内化、少人数化している。昼休みに校庭で、みんなで関わりながらダイナミックに遊ぶ姿が少なくなっている。特に遊びが少ない子どもは、イライラしており心の状態が良くなく、勉強が面白くない、親しい友達がいけないなどの状態にある。また、睡眠と精神衛生にも深い関係がある。睡眠は学力にも影響がある。広島県教委のデータによると、睡眠時間が少なくても長すぎてもいけない。8～9時間の睡眠時間の子どもが、算数の結果も良いとのことであった。朝食の摂取とも関連していて、生活のあり方と意欲とがつながっていることがわかる。

子どもの遊びや睡眠が不十分という状態にあることが問題であり、日本の子どものOECDでの国際学力が下がったとはいえ、それでも十分に持ちこたえており、これをさらにいじくり回して、親や地域の方を責めてもしょうがないのではないか。学習の前提条件と

なる、子どもの意欲を育てることが重要である。

それに対し、実践の紹介として、一つは山川東部小学校の事例である。放課後に仲間で縦割りで遊ぶ時間を取り、家庭や地域でも群れ遊びを活性化する働きかけを3年間取り組んだ結果、学校の教科への好感度が高まり、自主性や意欲、学力が高まってきた。仲間関係が豊かだと、子どもがリフレッシュした状態になりイライラせずに授業に集中できるのではないかと。また、アンビシャス運動についても紹介がなされた。アンビシャス運動の中間報告書では2箇所モデル地区から、自主性や自尊感情が上がってきているとの報告があり、前向きな心の状態が見られたとのことであった。つまり、子どもの意欲のためには「遊び」が重要で、大人主導ではなく、子どもが自由にケンカも助け合いもある仲間づくりが、学校や地域で作られるかどうかではないだろうか。

生活リズムについても、通学合宿では生活のサイクルの調整が行われていると思う。家庭の中で、親が遅寝遅起きだったり、子どもが遊んでいるかどうか分からないという状態だったりするが、そうした大人に対して正しい生活リズムのあり方のイメージをどう作っていくかというのが最大の課題ではないか。例えば、ドイツの商店では、夕方時間が来たらとにかく閉店する。日本は逆で、お客のニーズに合わせて遅くまで開けるようになっているが、ドイツのような発想も必要ではないか。

#### ◆「どれほど多くの大人が、きちんとやっていると言えるのか」—大坪コメントより

以上のシンポジストの発言に対し、大坪氏からそれぞれの発言にコメントが付けられた。

小学校や中学校でも、子どもの自主性や生活の自立性ということが、学校に任されているのではないかと。高校生の保護者という立場から見えてくるものとして、早朝の課外授業や土日の部活、福岡県の高校教育が、朝早くから子どもの勉強の相手をしてくれるなど保護者の『子育て依存』に応えすぎていることに大きな不安を感じている。子どもの生活リズムだけでなく、保

護者の生活リズムについても取り組みとしてどうにかしていかないといけなくなっているのではないかと。保護者の方々は自分の生活リズムが乱れているとは思っていないおらず、いかに学校から働きかけるかということが問われている。

高橋氏の小学校の取り組みは学校全体という単位で働きかけられ、広畑氏の中学校の場合には『学級』の単位の重要さが述べられたが、個別対応ではなく、複数の働きかけの大事さがある。正平氏は『通学合宿』という集団、横山氏は異年齢集団の『遊び』を媒介にした働きかけ。保護者の脱自己中心化からスタートするのであろう。

さらに、大坪氏からは、正平氏の発言に対し、このシンポジウムの一つのまとめとなるようなコメントが寄せられた。「朝早く起きて、夜ちゃんと眠って、ご飯をきちんと食べる。これだけのことがどれだけの多くの大人がちゃんとやっているといえるのだろうか。」多くの大人が耳が痛くなる話だろうが、結局はそこに帰着する。

この後、フロアから様々な質問や意見が出され、活発な議論が交わされた。熊本市に九州最大級のショッピングセンターが建設予定であり、そこから発生されるであろう子どもの生活の問題や、学力と日常生活の相関については戦後60年の間に枠組みが変わってきている、という指摘、家庭生活における来客の少なさが、大人に対する対人関係の力として育ってきていない、「困難に打ち勝って、疲れず」という言葉の深み、など様々な方面から発言がなされた。この問題の幅の広さを伺わせる発言の数々であった。

学力と生活体験の相関については、まだまだ議論されるべき余地が残されていると思う。今後は憲法・教育基本法改正の問題が、学力のとらえ方だけでなく、教育内容としての体験学習や生活体験に大きな影響を及ぼしてくると考えられる。今後も継続的に検討される課題として、研究を重ねていきたいと考える。

(報告・末崎雅美)